

近世における貨幣統一の一側面

——豆州内浦銭貨史料を中心に——

榎 本 宗 次

一 近世前期領国貨幣の停廃

第一期的領国貨幣ともいふべき近世前期の領国銀については先に述べたことがあるが、その後、発表された諸論稿⁽³⁾を参看しながら、いま一度その停廃について検討してみることにする。

狩野七郎右衛門書上⁽¹⁾によれば、寛文八年の段階ですでに領国貨幣を廃止したところは、信濃・飛騨・播磨・因幡・美作・土佐・豊後などであるが、このうち飛騨銀について小葉田淳氏は「江戸前期とくに寛文頃までは飛騨でも種々の灰吹銀、極印ある金森藩の極印銀が通用されていた事実は、ほゞ確かめられた」とされ、そして「梅鉢銀などの灰吹銀は寛文頃から或いはその後の近い時代に丁銀、または銀札に切替えられていったものと」想定されている⁽⁵⁾。また伊東多三郎氏は細川小倉藩の平田判について考証を加えられ、この領国銀は寛永九年の肥後への国替の後は史料の上から姿を消してしまい、「御金銀請払帳」の肥後時代に相当する寛永十年から同十九年の記録には銀はただ丁銀とあ

り、平田判はないから、細川氏の国替を機とし、平田判に代って幕府の丁銀が一般に流通するようになったとされている。⁽⁶⁾

ついで停止の時期の明確な藩としては秋田藩があり、幕府の金銀改鑄の行われた元禄八年に公貨との引替がもくろまれ、翌年より開始されたが、「退蔵・持出」によって進捗せず、同年十一月引替督励の布告が出され、元禄十二年八月には翌年より通用禁止との布告が出された。⁽⁷⁾ また加賀藩では寛文九年より引替が開始され、その作業は十二年頃まで続いたようである。⁽⁸⁾ 津山藩森氏時代に通用した「はやふきかね」は寛文六年に停止され、丁銀遣になったとい⁽⁹⁾う。また米沢銀の停廃が決定されたのは元禄八年であり、その実施は幕府の諸国灰吹銀通用停止令が布告された同九年から開始された。⁽¹⁰⁾

以上のように早期に領国貨幣の消滅するところもあったが、大体のところ寛文より元禄頃までに幕府金銀貨との切替えを終っている。そしてこの停廃の原因としては廻米制との関連なども考えられるが、最も密接な関係にあったのは鉾山の衰退であった。小葉田淳氏は日本鉾山史における三つの画期として、七―八世紀の律令的古代国家の確立した時代、十六世紀中期―十七世紀前期の近世封建体制の完成した時代、そして明治維新より明治の前半にかけて鉾山の近代化の行われた時代を挙げておられるが、⁽¹¹⁾ それぞれの時期はまた貨幣史の上からみても画期であった。この中で第二期が領国貨幣の最隆期に照応するわけであるが、その停廃についても鉾山と不離な関係にあった。

「狩野書上」には「前々は銀山あり、灰吹参る、近年不参」とあり、銀山の有無が灰吹通用の停廃とつながっていることを物語っている。小倉藩の平田判が寛永九年の移封を境に姿を消したことは先に触れたが、丁度その頃は金山が不況におちいり、運上皆無となった時期でもあったという。⁽¹²⁾ また加賀藩における領国貨幣の停止は寛文九年からであったが、その各鉾山の状況をみると長棟山は正保四年より銀山次第衰微山師退転に及び、虎谷山では寛文年中の頃よ

り山も不盛になり家数も年々退転し、また河原波山でも寛文の頃より少々宛かねも薄らぎ不繁昌になり、といったように寛文期の衰微が顕著であった。⁽¹³⁾

これを幕府側からみた場合、幕府貨幣による統一の志向は慶長金銀の鑄造の当初からあった。即ち慶長十四年五月、私鑄銀を防止して慶長金銀の流通を計るため、諸国の「銀子灰吹」と「筋金灰吹」の鑄造に対して禁令を発している。この灰吹禁止令はまもなく撤回され、諸国の灰吹銀はその後増加するのであるが、それは慶長金銀の流通量の寡少、諸国の貨幣需要の激増、および幕府の統一権力の未熟などによって実効を収めなかったためと云われる。⁽¹⁴⁾

そうした幕府の統一貨幣への志向を決定的にしたのは元禄八年の改鑄による貨幣増鑄発行であり、それにもついで布告されたのが元禄九年七月の古金銀灰吹銀停止令であった。そしてこの停止令が実効を収めえたのは、この頃までに諸国の領国貨幣を幕府金銀貨幣によって統一できるほど、幕府による金銀地金の独占化が実現したからであり、そしてこの過程は「一面に金銀外国貿易に対する幕府の顧慮と統制という事実をふまえ、流通経済の全国的な拡大と発展とを基本的条件とするが、とくに市場的中心をなす、大阪・江戸・京都の三都が幕府の支配下にあった」こと⁽¹⁵⁾に照応するものであった。

註

(1) これに対して藩札や幕末の諸藩貨幣を第二期ないし第三期的なものと呼称することができよう。

(2) 拙稿「近世前期における領国貨幣について」(史料館研究紀要第一号)・同「近世前期貨幣史における若干の問題」(日本歴史二四八号)・同「近世前期領国貨幣とその停廃」(歴史教育第十七卷第七号)

近世における貨幣統一の一側面(複本)

(3) 伊東多三郎「細川小倉藩の鉾山と貨幣」(日本歴史二四七号)・同「長州藩成立期の鉾山と貨幣」(森克己博士還暦記念論文集『対外関係と社会経済』所収)
小葉田淳「江戸前期の地方流通の銀―飛騨の流通銀―」(日本歴史二六〇号)

(4) 森田祐國「加藩貨幣録」所収

(5) 小葉田前掲論文

- (6) 伊東前掲論文
- (7) 山口啓二「秋田藩成立期の藩財政」(社会経済史学二四〇二)
- (8) 前掲拙稿(史料館研究紀要)
- (9) 伊東多三郎「近世初期の貨幣問題管見」(国民生活史研究) 2
- (10) 「米沢銀の流通」(藩政史研究会編・『藩制成立史の総合

- 研究」・米沢藩・第五章第五節)
- (11) 小葉田淳『日本鉾山史の研究』
- (12) 伊東多三郎「細川小倉藩の鉾山と貨幣」
- (13) 前掲拙稿(史料館研究紀要)
- (14) 『藩制成立史の総合研究』六五四頁
- (15) 小葉田淳『日本貨幣流通史』(昭和四十四年版) 附録三、
「領国武田氏の幣制と家康の幣制の確立」

二 寛永新銭の流通

以上、領国貨幣が停廃される寛文―元禄期についてみてきたが、この時期はまた錢貨の統一される時期でもあった。江戸時代を通して統一錢貨となった寛永通宝が鑄造発行されたのは寛永十三年であり、統一金銀貨の発行よりも三十五年程遅れている。しかし統一錢貨への志向は早くよりみられ、それは慶長九年二月、慶長十一年十二月、慶長十三年十二月、元和二年五月、元和四年二月、元和八年二月、寛永二年八月などの法令となってあらわれた。それらの法令に一貫してみられることは「最も忤びの強い永楽錢を流通界から排除し、また他方最も劣等な減価錢(なまり錢・大われ・かたなし等)を鑄錢の中より排除し、当代社会において量的に最も多かつた普通の鑄錢を中心に統一⁽¹⁾」しようとしていることである。そしてこのような統一への志向は寛永十三年六月の令において更に明瞭な形であられる。しかし未だ新銭・古銭の併用にとどまり、新銭一元化までにはいたらなかった。錢貨統一への志向が新銭一元化の段階に進むには――そこには藤田五郎氏が再三再四説かれた「農民的貨幣経済」の生成があり、それに対応するかたちで貨幣需要が増すわけであるが――なによりも基準錢の豊富な供給が用意されなければならなかった。

かくて寛永十三年の江戸と近江坂本での鑄銭からはじまって寛永十四年の水戸・仙台・松本・高田・長門・備前・豊後などにおける鑄銭となり、さらに引続き寛文年間にかけて大量の寛永通宝が供給されたのであった。そして寛文十年、寛永新銭一元化の法令が布達され、ここに錢貨政策は一段落をつけるのである。ではいかなる経路を辿って流通していったかといえ、一つには寛永銭が「年貢の貨幣納部分に——従ってまた農民の雑穀等の売買にも使用され」る途であるが、それよりも一層大きな錢貨流通の途は、道中筋を経由するものであった。中井信彦氏は東海道掛川宿の場合を例に挙げておられるが、中井氏の指摘されることと他の宿においても同様であった。後に問題にする豆州内浦に近い三島宿の場合には次のような史料がみられる。⁽⁴⁾

① 一錢百貫文

三島町御伝馬役人拝借

是ハ寛永拾三子年久留七郎左衛門、小幡三郎左衛門大坂々錢持參、金壹両ニ四貫文替ニ買上可申由ニ而拝借被仰付(後略)

② 一米貳千拾八俵

三島町御伝馬宿拝借

此錢貳千七百拾三貫百七拾三文

(中略)

所之相場を以金壹両ニ四貫文之後直段ニ而錢貳千七百拾三貫七拾三文返納仕候

③ 一金七百五拾兩

三島町江拝借

近世における貨幣統一の一側面(模本)

此錢三千貫文 但四貫文替

是ハ寛永十九年道中新錢下直ニ付、午七月々同十一月迄五ヶ月之内御買上ニ被 仰付候

右の史料にみられるように三島宿を通して錢貨の①投入、②吸収、③調節（錢価の引上げと引下げ）が行なわれているが、同様な錢貨流通政策は各街道にわたって実施された。⁽⁵⁾ちなみに延宝二年五月の伝馬宿拝借錢寛によれば、各海道と江戸伝馬町の総額は一四万一七〇〇貫文にのほり、各宿を通して投入される錢貨の量の莫大であったことを物語っている。⁽⁷⁾そしてこのような大量の鑄造と流通は古錢の鑄潰しを前提とするものであったようである。脇田修氏は『近世封建社会の經濟構造』の中で「古錢の吸収を予想している寛文の鑄造は、統一錢貨の全国的市場流通を決定づけた」とされ、また藤田五郎氏は『封建社会の展開過程』のなかで「一六六〇年代の徳川幕府における寛永通宝の夥しい鑄造發行は同時に爾余の貨幣の回收」を意味するものであったとしている。

このように寛永錢以外の古錢が鑄造材量として消滅したことは十分考えられることであり、また一方、小葉田氏の指摘されるように、海外輸出による古錢減少があった。即ち寛永錢は輸出禁止されていたが、「寛永錢の統鑄による増加に対して古錢は減少していったが、それは主として海外輸出の結果である」⁽⁸⁾と。

このようにみてくると、やはり「寛文の第三次鑄造によって前代以来の旧銅錢は全く駆逐され、錢貨は寛永通宝によって完全に統一された」⁽⁹⁾とみるのが妥当と考えらる。東北地方などで錢貨統一の遅れたところもあったが、それもせいぜい元禄期までであったようである。⁽¹⁰⁾

以上のことを念頭において、次に豆州内浦地方流通の錢貨について考えてみることにする。

註

(1) 藤田五郎『封建社会の展開過程』第二章「捩錢禁制と貨

幣改革」

(2) 寛文十年の触書は吹塵録・触書集成・徳川禁令考などに

掲載されているが、「大岡家文書」中の「集成令」国宝門には次のように記載されており、その日附まで判明する。文言は若干異なる。

寛文十庚戌年六月廿八日

覚

一寛永新銭之内江古銭を交諸色不可賣買之勿論錢屋兩替屋新銭ニ古銭を交商賈之仕間敷候右之趣相背者急度可行曲事者也

戌六月廿八日

(3) 中井信彦『幕藩社会と商品流通』一七九頁

(4) 三島市誌 中巻二〇八頁

(5) a、「吸収・調節」の史料

遠州浜松御城中銭納払御勘定目録

一、錢壹万貳千八百貫文

五味弥次兵衛
田宮久左衛門
森吉兵衛
荒井次郎右エ門

但小判三千貳百両也、金壹両ニ四貫文替

是は道中下直に付、為ニ寛永十九年一宿ニて金八両宛之積、浜松・舞坂・新居・白須賀町々御買銭取立、浜松城中に納置申候

(竹橋藏簡抄―竹橋余筆)

b、「調節」の史料

覚

近世における貨幣統一の一側面(根本)

一宮より桑名之舟壹駄五拾七文人壹人ニ貳拾四文

(中略)

右、近年島目下直ニ付て、如此今度駄賃錢まし候、但金子壹両ニ四貫文程之直段ニ成候時は、如前々可相直之、若此外、まし錢を取もの於有之は、可為曲事者也

寛永二十年

源左衛門 印

(御触書寛保集成一二五六)

○なお、右と同内様の史料で追分宿、下諏訪宿、塩尻宿に触出されたものが、「信濃史料」二十八巻553・558に掲載されている。

(6) 東海道分 六万四千四百貫文

中仙道分 貳万七千六百五拾貫文

日光井奥州海道分 壹万四千三百五拾貫文

甲州海道分 壹万貳千貳百五拾貫文

佐倉海道分 壹千五拾貫文

江戸伝馬江渡分 貳万五千貫文

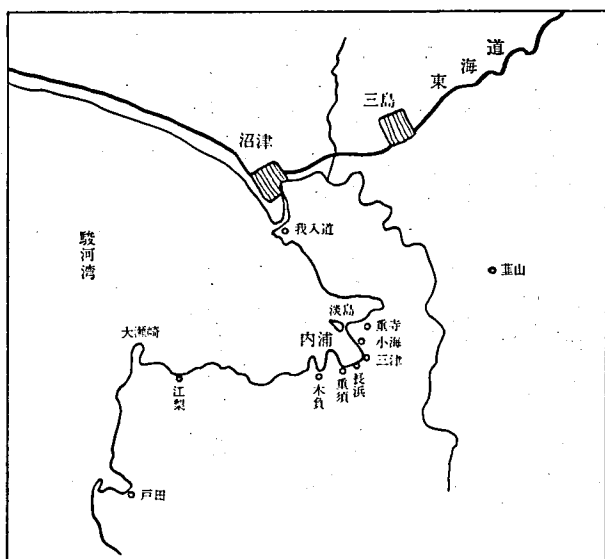
合拾四万七千七百貫文

(徳川禁令考 前集第六・三五四〇)

(7) 「折たく柴の記」巻下によれば、「寛文の時凡十六年の間」鑄錢量は一九七万貫に達したという。これを年平均すれば約十二万三千貫であるから、延宝二年の海道宿を通しての錢貨投入がいかに大量であったかわかる。

- (8) 小葉田淳『日本の貨幣』二〇頁、同『日本貨幣流通史』(昭和四十四年版)二五四頁
- (9) 中井信彦前掲書一八二頁、藤田五郎前掲書

三 豆州内浦における錢貨



- (10) 『藩制成立史の綜合研究』六六二—三頁。
 拙稿「近世前期貨幣史における若干の問題」(日本歴史
 二四八号)

『豆州内浦漁民史料』全四卷（上・中・之・中・之・下）が渋沢敬三篇著によって上梓されて以来、豆州内浦六ヶ村（重寺・小海・三津・長浜・重須及び明治以後西浦村に編入された木負）に關して、數多くの研究成果が發表されたことは周知のことであるが、小稿でもこの『豆州内浦漁民史料』（以下『史料』とする）および關係史料をもとに、当地方の錢貨について、錢貨統一策の観点から検討してみることにする。

まず地理的にみた場合、先に触れた三島宿や沼津宿が近くにあり、そこに先述のようなプロセスで錢貨が多量に投入されたことは間違いないところであるが、この両宿から色々な経過で内浦地方に貨幣が流入したと想定される。その一つは沼津をはじめとする周辺の魚商人の出入りによ

ってもたらされるものであった。⁽¹⁾ 一方、内浦漁民は、わずかの自己消費分を残して、ほとんど全部の魚類を売却する
 必要に迫られ、早くから貨幣経済にまぎこまれていた。⁽²⁾ そして内浦の漁業は立漁を主としたものであり、内浦におけ
 る貨幣取引も、この漁によるものが最も多かったと考えられるが、それとは別に、即ち津元支配漁業から独立した形
 での小規模漁業が発生し、それによって貨幣が獲得される場合も生じた。⁽³⁾

また内浦地方は関東に近く、支配関係からみても天領或いは旗本知行所であった地域が多く、またその期間も長か
 ったから、幕府貨幣の流通も早かったと考えられる。(図表参照)

表 内浦六ヶ村支配変遷表

	宝永 3		享保 8		享保 14		延享 4		天明 3		寛政 2		享和 2		文化 8	
	宝永 3	享保 8	享保 14	延享 4	天明 3	寛政 2	享和 2	文化 8	宝永 3	享保 8	享保 14	延享 4	天明 3	寛政 2	享和 2	文化 8
寺	問部(越前)	江川	平	小笠原	江川	大久保(加賀)		津田								
小海	問部(越前)	江川		小笠原	江川			津田								
三津		河原	松平	小笠原				津田								
長浜		河原	松平	小笠原				津田								
重須								大久保								
木負	問部(隠岐)			問部(安藝)												

—— 天領 私領

〔五味克夫「近世内浦組江栗村における津元藩子の保存と分一村請について」(市民文化論集1) 所収の表に追加したもの〕

その点、内浦地方は銀を主とした領国貨幣が十七世紀後半から十八世紀初頭ころまで使用されていた東北特に日本

海沿いの大名領とは異なっていたし、また西南諸藩とも異なっていた。山口和雄氏は内浦地方の場合について次のように述べている。⁽⁴⁾

「金銀貨のうちでは主に金貨が流通し、また藩札の使用はなかった。したがって以下の事例は銀貨が使用され、藩札が流通した西南諸藩の場合とはかなり異なるものであった」と。ついで山口氏は『史料』の中から金貨のみえる史料を指摘しておられる。このうち元禄以前についてみれば次表のごとく江戸小判、短冊、江戸判などの名称がみえ、慶長小判、慶長一分判の流通していたことが判明する。勿論このような名称がなくとも慶長金であった場合は寧ろ多かったと考えられる。

ついで銭貨についてみれば、寛永新銭もまた前節で述べた諸条件の中で、早期から流通していたと想定される。ところが内浦地方には京銭記載の史料が数多く残存し、しかもその記載は明治初年にいたるまで続いている。

		『史料』
寛永10	江戸小判	[69]
" 19	丹尺 (慶長一分判)	[79]
" 20	江戸小判	[83]
慶安1	"	[150]
" 4	"	[168]
" 4	短冊	[170]
明暦3	江戸小判	[233]
万治3	"	[244]
寛文6	江戸判	[271]
延宝3	"	[326]
天和2	小判	[376]
貞享4	江戸小判	[408]

山口氏は、この京銭または京の記載を極めて重視され、次のように述べておられる。即ち「京銭は寛永十三年以降も依然使用されたのであって、このことはこの史料集に収録された次の各年代の文書に『京銭』または『京』なる文字が示されていることによっても明らかである」として、寛永二十年三月から、享保十年十二月までの京銭記載の史料を指摘し、更に元文四年以降についても、京銭が実際には銭または米で支払う場合も出てきたとしながらも、やはり京・京銭の記載が各年代の文書にみえるから、京銭は依然通用したと説いておられる。さらに左に掲げる明治元年十二月の「重須村猪追足役割付帳」を引用

し、「京銭は寛永鉄銭すなわち鰐銭に比し次第に価値が高くなり、明治元年頃には三倍近くになったことが知られる」とされている。

寛

一京三貫文

年中猪追ちん

一同老貫九百文

大土圀修覆

一同貳貫文

新土圀修覆

一同六貫五百文

拾三軒足役ちん

メ京拾三貫四百文

此錢三拾五貫五百拾文

相場十貫六百文

そして山口氏は次のような結論を出しておられる。即ち「京銭は寛永十三年寛永銭の鑄造以後も依然通用した。ことに、正徳頃まではその流通はかなり一般的であったようである。ところが元文四年鉄一文の寛永銭が鑄造され、それが多量に出廻わるようになってからは京銭の流通高も次第に減少し、その価値も寛永鉄銭に比しかなり高くなつた。しかし、ともかく徳川期を通じ、前時代からの京銭が通用しつづけたのであって、このことは今まであまり注意されなかった注目すべき点である」と。しかし以上の説ならびに結論には首肯し難い点がある。

先ず山口氏が、このような結論を出された論拠であるところの「京銭記載」がどのような形式で史料にあらわれて

いるかをみると、おおよそ四つのグループに分けることが出来る。

A

①『史料』〔一一五〕

請取立物錢之事

合六百三拾六文ハ京錢也

右是ハ三津村ニ銚立候御三ヶ一御年貢ニ納所実正也仍如件

正保貳年酉之六月晦日 石十左 (印)

榊喜兵衛 (印)

三津村津本

伝左衛門殿

(以下略)

②『史料』〔一二四〕

請取立物金之事

合七百四拾貳文ハ京錢也

右是ハ長浜村ニ大まくろ立候御三ヶ壹御年貢金ニ納所実正也仍如件

正保三年戌二月晦日 石十左 (印)

櫛喜兵（印）

長浜村津本

平左衛門殿

B

『史料』二五三

請取申金子之事

一米老石老斗五升

定納歳暮錢

一米老石四斗三升三合

同夫錢

（中略）

一永四百文

定納かつ子船四艘役

一永八百文

同網船四艘役

一永九百五拾文

こかつ子船拾九艘役年々高下物

但老艘年ニ永五拾文宛

永合貳貫百五拾文

此金貳兩京六百文

二口金合拾五兩京貳拾九文

外ニ口米口錢濟

右者寅ノ歳重寺村万浮役金不殘請取相濟者也仍如件

近世における貨幣統一の側面（模本）

寛文貳年寅ノ十二月廿二日

持福庄太夫(印)

重寺村名主百姓中

C

嘉永元年十二月申重須猪追賃割付帳⁽⁵⁾

一京三貫文

年中猪追賃

一京壹貫九百文

大土囲修覆

一京貳貫文

新土囲修覆

一京六貫九百文

此鑑拾壹貫三百八拾五文

(後略)

D

①『史料』〔八〇八〕

、明和五子年舟役覚

一京百文

壹艘

久次郎

一京五十文

壹艘

権七

一京老貫七百文 大小 式艘 次兵衛

(中略)

六貫百文 大小十八艘

内

京四貫四百文

廻舟

京老貫三百五十文

小舟役

②『史料』(八五三)

天明四年辰正月伊豆国君沢郡長浜村村入用帳

一京老貫貳百文 是ハ去卯年諸帳面筆墨紙代

一京老貫五百文 是ハ去卯年中郡中入用并組割

一京三貫三百四拾文 定夫給

(中略)

棟貳拾六軒三分

京貳拾貫百貳拾四文六分

但老軒ニ付
七百六拾五文

(後略)

近世における貨幣統一の二側面(板本)

Aに属する史料、即ち「……ハ京錢也」「……ハ但京錢也」といった文言のみえる史料は寛永・正保・慶安・承応年間に多く、ついで寛文年間にもあるが、それ以後はあまりでてこない。

次にBは永と京とが併記されている場合で主として金納の史料に多くみられる。そしてCは錢或いは鑊と京とが併記されている場合で主として錢納の史料にみられる。そしてDは京のみの記載であるが、後述するようにAとは異なる。

Aの史料は京錢が寛永新錢と同価値通用した時期のものであるから、ここでの京錢は京錢そのものの、或いは寛永新錢そのものと判断される。しかしB、C、Dの史料のなかにみられる京は、結論から先に云えば、京錢そのものを指すのではなく、近世における「永」と同様に計算の補助単位として使われたもので、貨幣としての実体を持たない名目単位と想定される。以下B、C、Dのグループの史料を中心に検討しながら、「京」計算の補助単位」とみなす拙論を説明することにする。

豆州内浦漁民史料の中には『史料』に本文が掲載されていない横帳類が一二〇〇点余あるが（文部省史料館所蔵）、それらをも含めると、村入用割付、諸役錢賦課に關係した史料が極めて多い。これらの史料をみると浅草御蔵番入用、三嶋御陣屋番入用、名主組頭雜用遣、諸帳面筆墨紙代などの村入用や舟役、猪追役などの役錢は殆んど京錢で割付けられている。そして各々の京錢高はある年数にわたってみると連年一定の額のものが多かった。次表は正徳元年から享保十年にいたるまでの「内浦組長浜村諸入用帳」の内容を表にしたものであるが、定遣給は京四貫文、名主組頭雜用遣は正徳五年の京五貫五百文を除いて京五貫文に一定している。

また享保以降の村入用帳についても同様な傾向がみられるが、そのことを端的にあらわすものとして「嘉永元年長浜村申諸役入用割帳」がある。

内浦組長浜村諸入用帳

	正徳 1	正徳 2	正徳 3	正徳 4	正徳 5	享保10
浅草御蔵番入用	京 470	文 470	京 170	文 470	京 469	文 463
三嶋御陣屋入用	" 130	" 140	" 139	" 139	" 837	京 463
御菜浜塩鯛入用	貫 6,200	貫 6,000	貫 7,400	貫 7,000	貫 7,500	貫 4,000
猪鹿追払賃金	" 6,000	" 5,000	" 6,000	" 5,500	" 6,000	" 4,000
浪除嶋入用	" 5,000	" 5,000	" 5,500	" 5,000	" 7,000	" 5,000
名主組頭雑用遣	" 5,000	" 5,000	" 5,500	" 5,000	" 5,500	" 5,000
定遣給	" 4,000	" 4,000	" 4,000	" 4,000	" 4,000	" 4,000
紙代	" 300	" 250	" 250	" 250	" 300	

一京貳貫八百文 是ハ年中浪人山々勸化定式

一京三貫文 是ハ年中用紙筆墨料定式

一京五百文 是ハ年中村入用蠟燭代定式

一京四貫文 是ハ年中定夫給定式

一京貳百廿四文 是ハ年中村入用炭代定式

一京三百九拾文 是ハ村入用飯米代定式

一京貳百廿四文 是ハ村入用肴代定式

一京貳百九拾四文 是ハ村方番非人給定式

また先にあげた重須村猪追足役割付帳をみても、嘉永元年と明治元年とを比較してみると同項目は京で同額になっている。

しかも京は一貫して一両〓京四貫文、永一貫文〓京四貫文として史料にあらわれているのである。一目瞭然の例を示せば次のような場合があり、いずれも一両

〓永一貫文〓京四貫文である。

a、『史料』(二四五)

永合貳貫百文

代金貳両京四百文

b、『史料』(二五三)

永合貳貫百五拾文

代金貳兩京六百元

c、安永五年十二月申年長浜村諸役入用割帳

永八百七十文ト七厘

此京三貫四百八十三文

このようにみえてくると、連年一定した諸入用、諸懸りが、一兩〓永一貫文〓京四貫文と一定した京錢によって計算記載され、それが軒割り、あるいは高割りにされた後、当時の相場にみあった錢（寛永錢）——あるいは金、米——で収取され、実際の勘定がなされたものと考えられる。この間の経過を知る一例として、宝暦元年の長浜村の「諸役入用割帳」と同年の「未御年貢浮役諸役勘定帳」を夫々その一部についてあげてみると、諸役は京計算で行なわれ、老軒につき京七百四拾九文宛の割で三十六人に割付けられた。このうち三分の勘兵衛は京貳百貳拾五文、八分の角兵衛は京五百九拾九文を夫々分担し、最終的には高懸・舟役と一緒に当時の錢——一兩に四・二八貫——で夫々四百拾九文、八百三拾三文を皆済している。

諸役入用割帳

勘定帳

一京貳百文是へろうそく八丁代

勘兵衛

一京貳百三拾六文是へ八寸紙貳狀代

一京貳文 高懸

一京貳貫三百文是へ年中筆墨紙代

一京貳百貳拾五文 諸役

一京四貫四百六拾四文是へ定夫給

一京百六拾四文 舟役

（略）

〓京三百九拾老文

残而

京拾六貫五百四拾八文

此割

貳拾貳軒壹分

但壹軒ニ付

京七百四拾九文宛

(略)

三分

八分

勘兵衛

角兵衛

此鑑四百拾九文

角兵衛

一京拾三文

高懸

一京五百九拾九文

諸役

一京百六拾四文

船役

ノ京七百七拾六文

此鑑八百三拾三文

ところが同じ宝暦年間の諸入用割帳でも次のように京記載の全然みえない場合がある。即ち「宝暦十一年巳十二月去辰年三津村網度持^{久左エ門}七郎左エ門」与出入ニ付諸入用割帳」の場合である。この割帳の奥書をみると

右者去辰年他村網度持与出入ニ付諸入用割仕形網度持四分惣村中六分懸り内四分一者網子懸り此度如斯割定メ申候為後日此之通ニ割可申候以上

とあり、この諸入用割は臨時的なものであることがわかる。ということは、毎年恒常的に賦課されるものは錢相場の高下にかかわらない京で記され、その年の臨時的なものは最初から實際流通していた錢そのもので割付けられる場合があったということができよう。

一鑑貳貫八百七拾四文

是ハ去辰十一月十二日ハ十二月廿二日迄雜用諸遣共ニ

近世における貨幣統一の一側面(複本)

四分懸り 此割

但半状ニ付

老貫百五拾文

五拾八文宛

是ハ網戸持分

六分懸り

老貫七百貳拾四文

惣村可出懸

内

四分一

四百三拾老文

但シ老人前拾四文

是ハ網子三拾人ニ而可出分

四分三

老貫貳百八拾九文

但シ

貳拾三軒老分割
五拾四文一軒懸

四分軒懸
是ハ村中惣軒懸り

一貳拾貳文

平七

網子懸

一拾四文

同人

メ三拾六文

五分

一貳拾七文

太右エ門

網子懸

一拾四文

同人

メ四拾老文

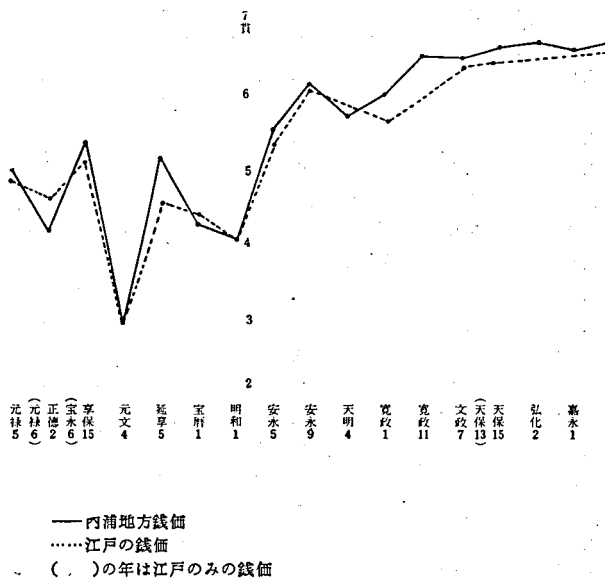
(以下略)

内浦地方の史料には以上みてきたように、京と銭（永と銭の場合もあるが）とが併記されている場合が多く、しか

内 浦・江 戸 銭 価 (1) 銭 貫

			一両ニツキ 銭 貫						一両ニツキ 銭 貫	
			内 浦	江 戸					内 浦	江 戸
元 禄	1.	12	5.0		寛 政	5.	1	5.8	5.46	
元 禄	5.	2	5.0		"	6.	1	5.8	5.73	
元 禄	6.			4.8	"	8.	1	6.0	5.89	
正 徳	2.	10	4.2		"	9.	1	6.2	6.24	
享 保	15.	6	5.3	5.13	"	10.	1	6.4	6.37	
享 保	17.	6	5.4	5.22	"	11.	1	6.6	6.42	
享 保	19.	9	5.3	5.06	文 政	7.	2	6.54	6.83	
元 文	4.	10	2.85	2.82	天 保	5.			6.58	
延 享	5.	2	5.04	4.58	"	6.			6.63	
宝 暦	1.	12	4.28	4.40	"	9.			6.69	
"	2.	12	4.36	4.43	"	10.			6.82	
"	5.	4	4.5	4.13	"	12.			6.99	
"	7.		4.16	4.25	"	15.	10	6.6		
"	9.	11	4.4	4.40	弘 化	2.	7	6.7		
"	9.	12	4.4		嘉 永	1.	12	6.6		
"	10.	8	4.448	4.29	"	5.			6.26	
"	11.	12	4.3	4.14	"	6.			6.27	
明 和	1.	12	4.04	4.05	安 政	2.		6.76	6.56	
"	2.	9	4.1	4.05	"	3.			6.62	
"	3.		4.08	4.04	"	4.			6.66	
"	4.		4.2	4.10	"	5.			6.71	
"	5.		4.25	4.28	"	6.			6.53	
"	6.		4.8	4.71	万 延	1.			6.55	
"	8.	12	4.5	5.37	文 久	2.			6.73	
安 永	5.	12	5.6	5.35	"	3.			6.72	
"	7.		5.8	5.88	元 治	1.			6.65	
"	9.	6	6.2	6.11	慶 応	3.			8.29	
天 明	4.	1	5.72	5.85	明 治	1.	12	10.6	14.00	
寛 政	1.	1	6.0	5.68						
"	2.	1	5.6	5.93						
"	3.	1	6.0	5.52						

内浦・江戸 銭 価 (2) (一両ニツキ 貫)



も京は四貫文に一定していたから両者の比較から直ちに当時の銭価を知ることが出来る。前頁の表およびグラフは京と寛永銭、永と寛永銭の夫々の比較から割りだした銭価に、「但六貫六百文割」とか「五貫五百文かへ」と史料に明記してある銭相場を加えて作成したものである。江戸における銭価をも入れてみたが、ここで注目すべきことは、内浦地方の銭価は江戸における銭価とほぼ同じ変動を示していることである。換言すれば内浦地方は江戸を中心とする銭貨流通圏ないしは、その周辺にあったと云うことが出来る。したがってまた、内浦地方だけに独自の銭貨が残存し、独自に流通しておったのではなかったということが理解される。内浦地方ではこのように相場の変動する寛永銭が実際に流通していたのである。だから重ねていえば、京銭は永が補助計算単位の役割を果たしたように、いわば「京建て」ともいふべき仕方で補助計算単位に使用されたものと考えられる。したがって山口氏が指摘するように「京銭は流通高を次第に減じ……その価値も今までのように寛永銭と同一でなくなり、高くなつた」のではなく、また「京銭は寛永鉄銭すなわち鑢銭に比し、次第に価値が高くなり、明治元年頃には三倍近くになった」のでもなく、寛

永銭そのものの相場が安くなったのである。

内浦地方では以上のような意味での「京建て」が行なわれ、金貨の補助計算単位としての永と、銭貨の補助計算単位としての京との二本立ての仕方が永く続けられたと考えられる。

「京銭記載」の意味を検討するという迂遠な方法で、内浦地方流通の銭貨についてみてきたのであるが、上述のように当地方においても寛永銭による銭貨統一策の貫徹されていたことは明らかである。

註

(1) (2) 『沼津市誌』中巻 一八三—六頁、荒居英次「近世日本漁村史の研究」第三部第二章「幕領伊豆内浦における漁税制の確立」

(3) 大石慎三郎「漁村における封建制の展開—豆州内浦長浜一村の場合—」歴史学研究一七二号、前掲荒居英次論文

(4) 山口和雄「『豆州内浦漁民史料』に現われた貨幣について」東京大学経済学会 経済学論集三三の一

(5) 特に註記しない史料は豆州内浦史料の中で『史料』に本文の記載されていないものである。現在、文部省史料館所蔵。

(6) 三井高維編述『両替年代記関鍵 卷二考証篇』と日本銀行調査局・通貨研究資料十二「日本における貨幣の流通と購買力について」とを参照し、その年々の相場の高下を平均したものをつかった。なお高低両方の銭価をグラフにすると、内浦の銭価のラインは大体高低の間を走るようになつたが、ここでは省略する。

近世における貨幣統一の側一面(複本)

(7) むしろ逆に「寛永の新銭に対し古銭の相対的減少とともに、同価通用は困難となってきたようである」(小栗田淳

に、『日本の貨幣』二二頁)とするのが妥当であろう。また「三貨図彙」物価部卷四には次のようにある。「正保三年六貫文 火鉢二ツ古銭ニ而買之 但シ古銭ハ凡新銭ノ半直ナリ、火鉢一ツ十六匁位ナルベシ、此頃迄古銭通用アリシコト見ツベシ」

(8) 内浦以外でも寛文以降まで京銭記載をする場合があった。例えば『正宝事録』(近世史料研究会編)所載の船役金はすべて京銭で記してあるが、これも名目的なものであった。(前掲拙稿・日本歴史二四八号)

付記

本稿は昭和四十四年度文部省科学研究費(一般研究D)による調査研究「幕藩制確立期における領国貨幣」の一部をなすものである。